The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本占領期の周作人に関する新資料発見 : 1942-45年の『東亜新報』を中心に
Author(s)	彭, 雨新
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 67-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本占領期の周作人に関する新資料発見：1942-45 年の『東亜新報』を中心に

彭　雨新

1. はじめに

本研究では、中国での調査によって新しく発見した、日本占領期の北京で発行された日本語新聞『東亜新報』を資料として用い、1942-45 年の紙面における周作人関係の記事を整理する。日中におけるこれまでの周作人研究に新資料を補い、日本占領期の北京における「現地日本語メディア」という報道・記録の新たな視点を提供することを主な目的とし、新資料に基づく周作人再考の今後の可能性も検討する。

『東亜新報』は 1939 年 7 月から 1945 年の日本の敗戦まで、主に北京で発行されていた日本語新聞である。対米英戦に備え、大陸在留民指導のため、北支軍と北京大使館が株主となって発刊した新聞であり、揚子江以北を『東亜新報』、以南を『大陸新報』としたと言われている。『東亜新報』について、「北支軍の機関紙」、「国策新聞」[1]として語られることが一般的であるが、文化・文芸面のコラムや記事は、日本占領下の北京や華北の文化生活、社会状況、習慣風俗などを検討する際、現地日本語メディアの視点として重要である。とりわけ、主筆高木健夫が書いた「北京横丁」「北京百景」をはじめとするコラムや記事は、北京や華北の生活や文化、習慣、風俗などを、覗き見趣味や優越的な視点からではなく取り上げていて、その息吹を感じさせるものも数多くあると言われている。しかし、『東亜新報』は日本における所蔵が非常に少なく、北京版は 1943 年 8 月 4 日一日分と 1945 年の数ヶ月分しか確認されていない。中国における所蔵状況も最近まで確認されておらず、参照できる資料は戦時中の新聞社の同人によって書かれている東亜会編（1984)『東亞新報おぼえがき:戦中・華北の新聞記者の記録』、及び当時『東亜新報』の学芸記者であった中薗英助が戦後に書いた小説くらいであった。よって、『東亜新報』に関する研究の進展は日中両国ともやや遅れている。一方、中国における所蔵の調査をめぐる先駆的な研究は、戸塚麻子、神谷昌史の研究である。とりわけ神谷（2016）は、『東亜新報』創刊期を中心に、新聞に関する基本情報をはじめて整理し、大量に提示している。戸塚、神谷が現時点で公開している研究論文から見ると、1939 年から 1941 年頃の『東亜新報』を写真保存していると思われる。

そのような状況の中、今年の 5 月、『東亜新報』を中心に、日本占領下の北京で発行された現地日本語メディアの保存状況を中国の上海図書館で調査した。時間的、経済的な制限

もあったが、今回は 1942 年 4 月から 1945 年 5 月分の文芸記事を中心に確認してきた。この三年分の『東亜新報』文芸関連記事には、周作人に関する報道が多数あり、これまでの周作人研究で注目されてきた「周作人狙撃事件」「周作人・沈啓无破門事件」に関する記事の他、1942 年、周作人が対日協力政権の「偽職」に就任し政界で盛んに活躍する姿や、1943 年、華北文壇の第一人者と見做される彼が、武者小路実篤、久米正雄などの日本人文学者と交流した記録なども見られる。

近年、日本占領期の周作人研究は、占領期の日記が未公開であることや新資料が見つからないことから、議論が活発に進展しているとは言い難い。今回発見した『東亜新報』における関連記事は、日本占領下の北京に残留し、政客と文士の狭間に苦悩する周作人の一側面を、北京における現地日本語メディアという独自の視点から報道しており、日本占領期の周作人研究に新たな可能性を提示している。

2.『東亜新報』記事による「周作人狙撃事件」「沈啓无破門事件」再考

狙撃事件と破門事件は日本占領期の周作人に関して度々議論されている二つの事件である。重要関係者である沈啓无（1902-1969）は周作人の弟子である。1939 年元旦の狙撃事件では、偶々現場にいたため彼も撃たれ、1944 年の破門事件では、師の周作人から破門を言い渡された。本節では、先行研究に基づき、事件の経緯を簡単に整理したうえ、『東亜新報』の関連記事を紹介し、今までの議論におけるいくつかの疑問点に対して新資料を補う。

2.1　狙撃事件における沈啓无の行動

1939 年元旦、周作人は自宅で 3 人の中国人青年に狙撃され、弟子の沈啓无は客としてその場にいた。周、沈ともに撃たれ、周は擦り傷だけだったが、沈はその場に倒れ、同仁病院で一ヶ月半ほど入院した。この狙撃事件を機に、周・沈の関係がいっそう親密になったとも言え、沈は北京大学文学院の中文系主任に抜擢され、周の推薦で 1942 年 11 月の第一回大東亜文学者大会にも参加した[2]。狙撃事件について、木山（2004）をはじめとする周作人研究に詳しい考察が見られる。しかし、周作人が書いた声明や記事が中心であり、同じ事件の当事者である沈啓无側の発言は見当たらないため、事件の経緯はまだ不明とも言える。

狙撃事件をめぐる議論の焦点の一つは、弟子としての沈啓无は、狙撃現場で先生の周作人を庇ったかどうかということである。狙撃事件後、沈啓无は周作人が学長である北京大

学で中文系主任として勤め、柳龍光の華北作家協会に参加してその中心人物になり、北京文壇で大きく活躍していた。また、周作人の紹介で大東亜文学者大会に参加し、林房雄、真船豊など日本文学報国会のメンバーと親しくなっていた。一方、1944 年、周作人は、沈啓无は自分を裏切った「恩師を反噬する中山狼」だと批判し、沈を破門した。破門事件によって、周作人は実質的に日本文学報国会と柳龍光らの華北作家協会と決裂したため、沈啓无と周作人の個人間の感情と交際は、沈一人の運命と深く関わっているのみならず、華北文壇と日本文壇にも影響がある。

沈啓无は狙撃事件において周作人を庇ったかどうかという問題に戻ると、周作人は「元旦的刺客」[3]という文章では、「その時、客（沈啓无－筆者）が立ち上がって『私は客だ』というのも構わず、彼にも一発撃った」と書いている。「元旦的刺客」は戦後の 1961 年 8 月、周作人が『光明日報』に投稿するために書いた文章であるが、内容に事実と合わないところがあると当時の編集者が判断したため、原稿が差し戻された[4]。周作人の回想では、先に周作人自身が撃たれ、沈はその巻き添えを食ったことになっているだけで、別に庇おうとはしなかったことになる。一方、沈の親友であった日本の劇作家真船豊（1902−1977）は、戦後に書いた私小説風の作品「苔と反故紙」（『心：総合文化誌』、1970−1971）の中で、沈をモデルとした人物について、狙撃現場で思わず先生をかばってその前に立ちふさがり撃たれたと描き、先生を庇った記念としての髭を破門された後でも剃らずに残しているということを創作している。周の証言も真船の小説も戦後に書かれたものであり、事実と完全に一致するとは言えないため、狙撃事件における沈啓无の行動はいまだに不明である。

破門事件前の 1943 年 10 月、『東亜新報』では朝刊四面で「文人像」というコラムがはじまっている。このコラムでは、当時の華北文壇の著名な文学者を毎日一人ずつ紹介していたのだが、最初に紹介したのは周作人（1943.10.8）であった。そのうち、狙撃事件については、「事変後にさへ凶弾を身に受けた氏が、いかに悽愴な鬼を蔵してゐるか肯けるであらう」と一言だけ触れている。その後、同月 16 日の「文人像」は、沈啓无を紹介し、その中で「周作人が狙撃されたときそれを庇って弾を受けた」と書いている。数日後の 10 月 26 日、27 日の「文人像」コラムには、「周作人狙撃事件顛末」（1）、（2）が連載され、正に沈啓无が周作人を庇ったかどうかについて検討がなされたのである。26 日掲載の「周作人狙撃事件顛末」（1）には、以下のように書かれている。

十六日付本欄文人像に、昭和十四年元日周氏が狙撃されたとき、氏を「庇って」沈啓无

氏が弾を受けたと書いて、周作人氏から正誤のお手紙をいただいた。その手紙を文人像子また誤読したので、結果は、沈氏は弾を受けぬといふ訂正を出してしまったのである。この訂正に関して更に周先生からのお手紙に接したので、一応この顛末を明らかにしておきたいと思ふ。　　「周作人狙撃事件顛末（1）」（『東亜新報』1943 年 10 月 26 日　四面）

この記事では、まず、狙撃事件と同年（1939 年）1 月 4 日の大阪毎日新聞を引用しており、そして、27 日の「周作人狙撃事件顛末」（2）では、松枝茂夫氏の『周作人文芸随筆抄』（富山房百科文庫 110）の末尾の「周作人先生」と題した周氏の伝記を引用している。大阪毎日新聞の記事にも松枝茂夫の文章にも、沈啓无が周作人を「庇った」とは書いていないことに対し、『東亜新報』は以下のように解釈している。

こゝで文人像にかへると、愛弟子である沈氏が狙撃されんとしてゐる周氏を前にして、どんな態度をとつたであらうか、といふことに対して、日本人流儀の解釈で、何等の問題なくすらすらと美談が出来てしまつたといふわけである　つまり上掲の二つの記事になんら「庇ふ」といふ文字がないにもかかはらず、そこに描かれた色彩は「言葉」の外の現実に深く触れてゐると思はれたからであつた。

「周作人狙撃事件顛末（2）」（『東亜新報』1943 年 10 月 27 日　四面）

つまり、普通の日本人の考えでは、弟子の沈啓无は師を庇ったと思いがちであるが、真実は分からないということである。また、周作人が『東亜新報』に送った正誤の手紙の内容は掲載されていないが、わざわざ手紙を送ったという行動自体からは、周作人が「氏を『庇って』沈啓无氏が弾を受けた」という『東亜新報』の報道に納得していないことが明らかである。1943 年 10 月という時点に注目すると、周作人と沈啓无の仲が悪くなりつつあるとはいえ、まだ破綻していない時期である。したがって、狙撃事件において沈は自分を庇っていないという周作人の主張は正しいのではないかと思われる。

2.2「破門事件」と周作人の手紙

周作人と沈啓无の師弟関係は 1944 年 3 月の破門事件で終わった。1943 年 8 月、沈啓无が参加した第二回大東亜文学者大会において、片岡鉄平が、直接名指しはしていないが周作人を暗示する「反動老作家」を批判した。周作人は、片岡の動きの背後に、日本文学報国会の林房雄と、林と親しい自分の弟子である沈啓无らの働きかけがあると判断し、1944

年 3 月 15 日、「沈楊すなわち沈啓无は受業の門弟であるが、最近傲慢になり、無理の言動があるゆえ、破門にする（後略）」という「破門声明」を上海の『中華日報』で発表した。その後、周作人はまた同紙で「一つの手紙」（原題「一封信」、3.27）、「文壇の分化」（原題「文壇之分化」、4.13）、「一つの手紙の後文」（原題「一封信的后文」、4.25）など破門をめぐる一連の文章を発表し、華北文壇に大きな影響を与えた。また、「狼と出会う物語」（原題「遇狼的故事」、『古今』1944. 4.16、45 期）、「東郭に関して」（原題「関於東郭」、初出不明、原文未見）の中で、「恩人の東郭先生を反噬する中山狼」という典故を用い、沈啓无のことを「中山狼」だと揶揄している[5]。「文壇の分化」にはすでに、「弟子の恩師に対する反噬」（弟子对于恩师之反噬）、「弟子が師父を食う」（徒弟要吃师父）などの表現が度々見られ、後に出た「狼と出会う物語」などの文章と合わせて読むと、沈が「中山狼」に例えられていることはより一層明確になっている。破門された後、沈啓无の北京大学での職は奪われ、他の文化機関も基本的に沈ではなく周作人を選ばなければならなかったので、沈は北京大学でも北京文壇でも居場所を失ったのである。

破門事件について、周作人が中国の新聞雑誌で発表した文章のほか、実はもう一つの資料が見られる。それは、戦時中『東亜新報』の学芸記者であった中薗英助が、戦後に書いた長編小説『夜よシンバルをうち鳴らせ』（現文社、1967）である。小説の第十三章「中山狼禍」において破門事件が描かれ、とりわけ、周作人が事件について「私」（モデル：中薗英助）宛に書いた私信が詳しく描写されている。

新聞社に勤めている私のところに、周作人の親書が送られてきた。しかし、編集局長が勝手に開封し、そっくりそのまま新聞原稿代わりに文化欄に組んだ。私は私信を受取人にことわりなく新聞に載せられ、個人の権利が踏みにじられたことを局長に抗議したが、局長は私に、新聞記者なら新聞を一番大事にすべきだと言って叱り、私の主張する個人の権利は自由主義思想だとも批判した。

私は後に周作人の手紙を読むが、そこには沈啓无が師である自分を匿名批評し裏切ったことが語られており、「これをしも、師を喰らおうとした狼といえよう。すなわち、昔中山で死に瀕して人に救いを求めた狼が、助けられるや否や、たちまちその救命者を喰らおうとした忘恩の故事に見る＜中山狼＞というべきであろう」（pp. 373-374）とも書かれている。

この小説について、木山（2004：239）は「『東亜新報』記者中薗英助には、匿名攻撃の主が明かし、恩人を逆に喰おうとした『中山狼』の故事を引いてその行為を責める趣旨の手紙が、周作人から来たと言い、彼は自分宛の私信をデスクが無断で掲載したため、この邦字紙がはからずも『武徳報』系の周作人攻撃に対する反撃の場面を提供する結果になったいきさつを、例の小説にも書き込んでいるが、いきさつ自体に虚構はないそうだ」と述べており、中薗自身の北京での記者時代に基づいたこの小説はある程度事実を反映してい

ると思われる。

このような当時の新聞記事、戦後の小説といった資料を踏まえたうえで、『東亜新報』が破門事件を如何に報道したか、そして、実際に周作人の手紙があるかどうかを、今回の調査で明らかにしようとした。周作人は「破門声明」をはじめ、事件に関するほぼ全部の文章を南京、上海の新聞雑誌で発表した。ゆえに、最初に事件に反応し、報道したのも華中地方のメディアである[6]。しかし、周・沈の断絶に最も影響を受けたのは華北文壇である。『東亜新報』も南京のスクープを用い、「華北文壇に一投石（上、下）　周作人氏の沈啓无氏破門」（1944.5.2、5.4、黒根祥作筆）という記事で事件を報道した。5 月 2 日掲載の上篇では、周作人「文壇の分化」が初出新聞『中華日報』で重視されていることと、氏の文章がすでに南京、上海方面の中国側文壇、学界に大きな波紋と精神的衝動とを巻き起こしたことを紹介し、「文壇の分化」の内容を要約して翻訳している。華中と華北は政治的、文化的に事実上隔離されている状態の中、華北地域の日本語メディアとして初めて破門事件を報道し、「文壇の分化」を訳したという『東亜新報』の功績は大きい。5 月 4 日掲載の下篇では、周作人の文章における「（一）弟子の恩師に対する反噬」、「（二）文壇分裂の暗示」という二点について、さらに詳細を紹介したうえで、以下のように分析している。

> 以上周氏の論文の大意を紹介し得たわけだが、この文章が中国知識階級、否朝野の人士に与へた影響は非常に大きく、決して周氏と沈氏との不和、華北中国文壇の分裂といつた問題だけに止まらないようだ。筆者は周、沈両氏とも一面の識があり、かつ文壇の消息に疎い者であるので兎角の批判は避けるが、中国学界の君子人たる周作人氏の如き人物を斯くも不快にし、惑はしめた日華両国の後進文学者らの態度は反省されてよきものあるべく、特に中国側の事情に通ぜぬ我が国の関係者がそれぞれの接触面にて出過ぎたる振舞ひをすることは極度に戒められねばならぬとの生きた参考資料となるであらう。
>
> 「華北文壇に一投石（下）　周作人氏の沈啓无氏破門」黒根祥作
>
> （『東亜新報』1944 年 5 月 4 日　四面）

『東亜新報』が華北現地の状況に詳しい日本語メディアとして、最初から破門事件の影響を深刻に受け止め、「中国学界の君子人」である周作人を非常に尊敬していることが読み取れる。事件に関わっている林房雄、片岡鉄兵など日本の文学者は大東亜文学の指導者とも言える日本文学報国会の代表であるにもかかわらず、『東亜新報』が自国と自国の文学者

たちに加担することなく、出過ぎたことをしないように注意してほしいという反省的な態度をとったことは、同時代の日本語メディアにはごく稀なことであろう[7]。

次に、中薗の小説に描かれている通り、5 月 4 日所載「華北文壇に一投石（下）」と同じ面には「周作人氏より」という周作人からの手紙も確かに掲載されている。

> 本欄掲載の黒根祥作氏「華北文壇に一投石」に対し周作人氏より五月三日左の如き書簡に接したので掲載する＝原文のまゝ
>
> 拝啓、今日貴紙に出た黒根氏の通信を拝見しました、上の分だけですから別に意見もありませんが　私個人のことから　世間騒がせして　恐縮します、通信の中に師父を叱るといふ言葉がありますがあれは間違ひでして原文は吃師父ですから師父を喰ふといふ事です、昔中山の狼が恩人の年寄を喰ふといふ伝説がありますから喰ふの字をそこに使ひました、どうぞ御訂正下さる様御願ひ申します、ついでに沈の某攻撃の文章は「文筆」に出た一つだけでなく一昨日民衆報終刊号に甘玲の名で書いたものも沈某の筆だといふ事情を御知らせ致します、狼の面目はもう一層ハツキリしてきたから非常に参考に成ります
>
> 五月二日　周作人
>
> 「周作人氏より」（『東亜新報』1944 年 5 月 4 日　四面）

小説では、「私」は周作人の手紙を読んで初めて破門のことを知った。一方、現実には、周作人が「華北文壇に一投石（上）」という記事を読んで、『東亜新報』に訂正の手紙を出したのである。手紙の中で訂正しようとしているのは、「華北文壇に一投石（上）」における「私は元元毫も彼らが新中国創造の線に沿ふのを妨害する意志を持なかつたので従来ただ作揖（賛同というほどの意）主義を取つてゐたが、徒弟が師父を「叱」ることは世界各国にこの規定がないと考へ、今後も更に作揖するわけにはゆかず、やむなく破門にて片付け、これより後は完全に関係を断つことを声明するだけだ」という記述である。『東亜新報』関係者が読んだと推測できる「破門声明」「文壇の分化」など事件と直接関わる文章には、「中山狼」という言葉が使われておらず、「喰う」だけが書かれているため、『東亜新報』が翻訳した時読み間違えたと思われる。周作人のこの手紙により、日本側は初めて破門事件において周作人が沈啓无を「中山狼」に例え、批判していることが分かったはずである。

周作人の手紙が中薗宛であったかどうかは不明であり、むしろ新聞社宛だったと考えたほうが自然であろう。これについて、中薗の小説においても、登場人物である編集局長が「周作人先生は、わが華北日報社に大いに訴えたかったんだ。いわば、これは発表を予定してわが社に下さった手紙だ」（p. 373）という台詞を述べている。このことから、私信をめぐる「個人の権利」の口論は小説のための創作かもしれないが、周作人の手紙の内容、および最初から公開する予定の手紙であったことは事実と一致していることが分かる。

また、「華北文壇に一投石（上、下）　周作人氏の沈啓无氏破門」の署名筆者である黒根祥作は、実は東亜新報社の三人の取締役の一人であり、汪兆銘『日本と携へて』（朝日新聞社 1941）の日本語訳者である。「華北文壇に一投石（下）」には、筆者（黒根）は周、沈両氏とも面識があるとも書いている。しかし、「東亜新報社・社員名簿」（東亜会編 1984：193−209）を調べると、黒根は取締役である以外、編集・執筆に係る具体的な職位を兼任しておらず、今回調査した新聞紙面においてもほとんど名前が見られないため、「華北文壇に一投石」という記事の本当の執筆者ではない可能性もある。汪兆銘の著作を翻訳した経歴から、黒根は汪政権に親しい人物であることは明らかである。ゆえに、黒根は汪政府の機関紙である『中華日報』で発表された周作人の「破門声明」「文壇の分化」などの文章に注目し、『東亜新報』に報道の指示を出したのではないかと推測する。

『東亜新報』に実際に掲載されている破門事件の関連記事と周作人の手紙は、中薗の小説と細部において相違点が見られるが、木山のいうように「いきさつ自体に虚構はない」と思われる。『東亜新報』の記事と中薗の小説は、戦時中の華北日本語メディアが破門事件をどのように受け止め、報道したのかを裏表から示しており、占領下北京を考察する資料としての価値が高いと考えられる。

3.「華北文壇の老大家」の文芸活動－1943 年の武者小路実篤との交流を中心に－

従来、周作人と武者小路実篤の交流について、二人が書いた回想文や、書簡などを用いた、「新しき村」をめぐる議論が多く見られる。しかし、戦時中における周作人と武者小路の交流について言及するものは少なく、代表的なものとしては董（2012）、顧（2017）がある。本節では、1943 年の周作人と武者小路の北京での面会について、先行研究を踏まえたうえで、『東亜新報』の関連記事と『東亜新報』関係者の回想文を紹介し、1943 年の二人の交流状況を再整理する。

1943 年 4 月、武者小路実篤は日本文化使節団の成員として、南京中日文化協会第二次全国代表大会に参加したのち、北支、満洲、朝鮮を訪れた。董（2012）はこの 1943 年の武者小路の中国訪問について詳しく考証し、未公開の周作人日記に基づき、4 月 18 日午前、武者小路が庸報社主催の座談会に参加して周作人と会ったこと、そして同日午後、北京八道湾 11 号における周宅を訪問したことを述べている。そして、この 1943 年の中国訪問をめぐる、武者小路が書いた 6 篇の文章を提示している。一方、木山（2004：220）は、武者小路と周作人が、北京での座談会、民芸関係の見学会、周家訪問、そのあとの何かの宴会で、互いに何度も顔を合わせながら、二人だけでゆっくり話す機会を得ず、最後は不本意な次第に終わったと述べている。もう一つ、この交流について言及したのは顧（2017）であり、

調布市仙川の武者小路実篤記念館が所蔵している武者小路、谷川徹三らと周作人、銭稲孫らの北京での写真（1943 年 4 月北京で）と、周作人親族所蔵の武者小路の周作人宛書簡といった資料に依拠している。とりわけ、そこで紹介している、1943 年 4 月の中国訪問後、武者小路が日本から周作人に送った手紙には「北京ではゆつくり御話する閑がありませんでしたが御逢い出来、その上御愛蔵の磚を戴き誠にありがたう御ざいました。（中略）その御礼としてどうかと思いましたが、私も愛蔵してゐましたものを一つ差し上げたくいろいろ考えた結果、四暢園を選びました。御気に入つて嬉しく思ひました。平和になつてゆつくり御逢ひ出来る時が今生にある事を望んでおります」[8]と書かれている。そして、顧は同年北京に行く画家・宮崎丈二に託して富岡鉄斎の扇子絵を周作人に届けさせたことに触れている。しかし、扇子絵を周作人に贈るという情報の典拠は明示していない。おそらく親族の所有する未公開の書簡が典拠であると思われる。

今回調査した『東亜新報』の 1943 年 1 月分、4 月分の所蔵が不明であるため、4 月における武者小路関係の報道は直接確認できなかったが、『東亜新報』の元記者の中野政成が書いた「西域潜入・前線取材日記」（東亜会編 1984：108-123）という文章には、1943 年 4 月武者小路の北京旅行にあたり『東亜新報』紙上で行われた「日華二大文豪之対談」という武者小路と周作人との対談、周宅で咲き誇る丁香の花の下の二人の写真、そして中野政成が代筆し『東亜新報』に連載された武者小路の偽作までが記録されている。

一方で、顧（2017）に言及されている「富岡鉄斎の扇子絵」については、『東亜新報』9 月の記事から詳細が確認できた。「武者小路氏と周作人氏　日華文化人の友情　　使者に持たせて　鉄斎の扇面」（1943 年 9 月 23 日、三面、図 1）と「扇面に籠る日本の友情　うける周作人氏・この日はれやか」（1943 年 9 月 28 日、三面、図 2）という二つの記事である。

9 月 23 日の記事については、「武者小路実篤氏は、その帰途を古都北京に立ち寄り中国古代文化の跡を視察すると共に、中国文化人と膝をまじへて大東亜将来の文化建設について懇談し文化使節としての使命を果して帰国したが、特に中国文壇の巨星周作人氏との対面は大東亜文化の新展開を劃するものとして注視せられた」とあるように、その内容からは、4 月、武者小路が文

図 1 ：『東亜新報』1943 年 9 月 23 日
「写真＝武者小路氏（右）から周作人氏（左）に贈られた鉄斎の扇面」

化使節として北京から日本に帰る前の周作人との交流が、ある程度うかがえる。とりわけ二人の対面について、「両氏はこれを機会に米英文化敗退後の中国文化を、東洋固有の民族性に即した文化に盛り上げるべく、お互い身命を賭さうと固く誓ひの手を握りあつた」と回顧し、周作人が愛蔵の硯を武者小路に贈ったのもこの時であるとしている。武者小路は答礼として富岡鉄斎の扇面を、彼の主宰する煙雲会の同人である宮崎丈二画伯に託したのである。同記事には、宮崎丈二への取材も見られ、宮崎は自分は「両先生の美しい友情の使節」だと語っている。

図 2：『東亜新報』1943 年 9 月 28 日
「友愛の扇面に見入る周作人氏」

さらに、28 日の「扇面に籠る日本の友情　うける周作人氏・この日はれやか」という記事には、今まで知られていなかった、周作人の扇面を受け取った感想が以下のように報道されている。

> 盟友の愛情こもつた軸を手にした周作人氏は、おさへきれぬ喜びを頬に輝かせながら語る「こんなに立派な軸物を戴いて恐縮です、私も日本に留学したが明治の年末だつたものですから当時日本画壇の巨星だつた富岡鉄斎の画は随分みてゐます　これは鉄斎のものでもなかなかの逸品です、武者小路さんの友情を感謝するとともに、これを通じてますます日華文化の交流と大東亜文化の建設に働かして貰いませう」
>
> 「扇面に籠る日本の友情　うける周作人氏・この日はれやか」
>
> （『東亜新報』1943 年 9 月 28 日　三面）

武者小路と周作人の友情は、戦時中日華文壇の提携親善の代表として宣伝されていると同時に、周作人自身も「これを通じてますます日華文化の交流と大東亜文化の建設に働かして貰いませう」と宣言している。しかし、1943 年 8 月、第二回大東亜文学者大会を開催する前、周作人は久米正雄の参会の誘いを断り、会議中、片岡鉄兵に「反動老作家」として批判された。このことから考えると、この時期の周作人は日本の文化人・文化組織に反抗的な態度を抱えているはずである。一方、第 2 節で紹介しているように、周作人は『東亜新報』の記事における誤謬に対し、度々訂正を求める手紙を送った。ゆえに、ここに掲

載されている内容は、確かに周作人本人の発言だと考えられる。したがって、『東亜新報』における周作人と武者小路の交流に関する報道は、両氏の文化交流を反映しているだけではなく、1943 年という時点における周の「占領地の文化巨星」としての立場、そして大東亜文化建設という日本側の方針に対する複雑な考え方について、新たな解釈の余地を提示しているのである。

1943 年の『東亜新報』を概観すると、「華北文壇の老大家」である周作人の文芸活動に関する報道が比較的多い。上記の武者小路との交流のほか、周作人の「新文学運動第一線への復帰」と見なされる芸文社の結成と、雑誌『芸文』の発刊に対し、日本文学報国会の派遣で北京に滞在している林房雄が「大いに喜び」、周作人に期待するという記事が『東亜新報』3 月の紙面に発表されている。また、第二回大東亜文学者大会の後、当時日本文学報国会事務局長を務めていた久米正雄が北京に来た時に、また周宅を訪れ、周作人と文学対談を行ったという記事が同年 11 月の紙面に見られる。このように、周作人と日本人文学者をめぐる報道は 1943 年の『東亜新報』に頻繁に見られる。その報道からは、周作人がついに文壇へ復帰したことがうかがえ、彼が日本文学界から重要視されていることが分かる。しかし、1943 年 8 月に東京で行われる第二回大東亜文学者大会に参加してほしいという久米正雄の誘いに対し、周作人は断った。そして、同大会における片岡鉄兵の周作人批判の裏には、沈啓无と林房雄の策動があったと周作人は判断した。ゆえに、1943 年の『東亜新報』に反映している周作人と日本人文学者との交流の様子からは、旧知としての友情や日華文学をめぐる交流以外に、日本人文学者の背後にある日本文学報国会、大東亜文学者大会といった政治的力が、周作人に与えている期待と重圧が読み取れる。また、周作人の矛盾しているようにも見える日本人文学者に対する態度からも、この時期の彼と日本文壇との網引き、そして彼自身の複雑な心境の一端がうかがえる。

4. おわりに

本稿では、日本占領下の北京における唯一の日本語新聞『東亜新報』に注目し、調査によって新しく発見した周作人関係の記事を整理した。そのうち、1943、44 年の記事を中心に、周作人狙撃事件、沈啓无破門事件、そして周作人と武者小路実篤の交流について考察を行った。実は、1942 年の『東亜新報』には、周作人が華北政務委員会教育総署督弁に就任し政界で盛んに活躍する姿が報道されている。また、1945 年 4 月、5 月という敗戦直前の時期においても、周作人が日本側主催の「初の大陸川柳展」に詩文を寄付し、東亜文化協会の会長として日華協会の成立に同紙で祝辞を述べている。紙幅の都合により、その年の分の詳細はまた別稿で論じる予定である。『東亜新報』は、こういった日本と中国、政客と文士の狭間でもがいている日本占領期の周作人の一側面をよく反映している新資料であり、日中の周作人研究、そして日本占領期の北京文壇研究に大きな価値を持っていると考えられる。

＜付記＞『東亜新報』記事の引用は、漢字及び繰り返し記号を適宜現行のものに改めた。原本には改行などにより、句読点が付いていない場合があり、該当箇所には全角スペースを置いた。

・参考文献：

神谷昌史（2016）「『東亜新報』研究のためのおぼえがき:創刊期を中心に」『滋賀文教短期大学紀要』(18), 滋賀文教短期大学, pp. 17-24.

戸塚麻子（2016）「日本占領下北京の青春と友情―長野賢（野中修・朝倉康）の『燕京文学』掲載小説をめぐって」『滋賀文教短期大学紀要』第 18 号, pp. 25-37.

木山英雄（2004）『周作人「対日協力」の顚末』岩波書店

東亜会編（1984）『東亞新報おぼえがき:戦中・華北の新聞記者の記録』東亜会

顧偉良（2017）「日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想」『世界の日本研究 2017』, pp. 222-243.

董炳月（2012）「1943:武者小路实笃的中国之旅」『文学评论』(03), pp. 142-146.

张泉（2005）《抗战时期的华北文学》贵州教育出版社

散木（2002）「周作人的两个学生和弟子」『文史精华』(09), pp. 59-64.

穆欣（2000）「《光明日报》拒发周作人《元旦的刺客》」『世纪』(06), pp. 26-29.

---

[1] 東亜会編（1984：3–4）「序」による。

[2] 周作人「文壇の分化」（「文壇之分化」『中華日報』1944 年 4 月 13 日）では、沈啓无について「前回の文学者大会（第一回大東亜文学者大会を指す）に代表の一人として出席したのも、実は私が行かせたのだ」と書かれている。原文中国語は「就是前一次出席文学者大会，算是一名代表，也是我派他出去的」、日本語訳は木山（2004：216-217）による。

[3]『知堂回想録』p. 573。本稿が依拠した版本は、三育図書文具公司（香港）、1980 年 11 月版。中国語原文：那时客人站了起来，说道「我是客。」这人却不理他，对他也是一枪，客人应声扑地。

[4] 穆欣（2000：26-29）

[5] 散木（2002：63）による。

[6] 上海の日本語新聞『大陸新報』は「文化直言」（1944.4.19）という記事で、周作人の「一つの手紙」（「一封信」）と彼の文化界から引退するという宣言を報道し、片岡鉄兵の（老作家批判の）言論が過激で、無責任だったと批判している。しかし、沈啓无に対する破門については言及していない。

[7] 華中の日本語新聞『大陸新報』も片岡鉄兵と日本文学報国会を批判する立場であるが、それは『東亜新報』と同様に、現地日本語メディアであるからこそ出せる少数派の言論だといえる。日本の占領地メディアに対する言論統制は比較的緩やかだったのだろうと張泉（2005：211）が分析している。

[8] 顧（2017：232）。『東亜新報』所載写真により、手紙における「四暢園」は、実は鉄斎の扇子絵の題材「四暢図」の間違いだと思われる。